浄土真宗における伝道活動の実践的研究

――統計調査・実地調査を踏まえて――

葛野洋明

はじめに

浄土真宗における伝道活動について、統計調査や実地調査を踏まえて実態の把握に努め、従来の真宗学が培ってきた学問的知見や領域を元にしつつ、相互的な検討を踏まえて実践的に研究し、浄土真宗における伝道活動の重要な視点を明らかにする。

1．伝道活動について

伝道活動とは、様々方途をもって展開されている布教伝道の実践の1つであるが、寺院の内外に関わらず、阿弥陀如来を中心とした宗教的空間において、読経や礼拝、説法や聴聞などをもって、ともに阿弥陀如来の仏徳を讃嘆することと言えよう。

この伝道活動は、浄土真宗における中心的な実践の1つと考える。信心の利益として常行大悲の益を得、「必具名号」と展開する信後相続の称名には、上讃仏徳・下化衆生のはたらきがある。そのような念仏者の実践において、

ともに阿弥陀如来の仏徳を讃嘆する伝道活動は、浄土真宗という教法を基とする実践において、非常に重要な位置を占めている。

伝道活動が、浄土真宗における実践の中で、中心的な位置を占めることは、教義的な視点からだけではなく、社会的な存在意義を明示しなければならない宗教法人の法規の上にも窺える。

浄土真宗本願寺派という宗教法人は、浄土真宗という教法を基としていることは言うまでもないが、その社会的存在意義を明確に示しているのが「浄土真宗本願寺派　宗制」（以下「宗制」とする）である。「宗制」は浄土真宗の教法に基づき、浄土真宗本願寺派に所属する人、包括されている寺院等の社会貢献が明示されており、実践の基本の1つということができるであろう。この「宗制」に明らかにされた社会貢献の視座から、浄土真宗における実践についてを窺うことができる。

「宗制」の前文には、その後の各章で述べる内容が、総括的に述べられている。その後半部分には社会的意義について言及されている。いまその文を上げると、

本宗門は、その教えによって、本願名号を聞信し念仏する人々の同朋教団であり、あらゆる人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝え、もって自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現に貢献するものである。(1)

となっている。本願寺派とは、親鸞聖人が開顕された浄土真宗という教法を基にした同朋教団であり、その教えを自ら聞信し「あらゆる人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝え」ることが実践の本義として示されている。そのことによって、「自他共に心豊かな社会の実現に貢献する」と社会的意義が示されている。

自らが浄土真宗という教法を聞信し、人々に伝えるという「自信教人信」「仏徳讃嘆」に本義があると示されていることから、伝道活動は、浄土真宗における中心的実践の1つということが言い得るであろう。

2・伝道活動の研究方法について

伝道活動の実践は幅広く行われている。この伝道活動を研究するには、伝道活動が実践されている実態を把握することが重要である。広範囲において行われ多種多様な活動に展開されている実態を把握するためには、統計調査の分析結果を参考にすることが重要である。

統計学や社会学に関する専門性をもたないので、詳細な定義はなしえないが、ここでいう統計調査とは、質問紙法を用いて、広範囲にアンケート調査を実施し、そのデータを統計学や社会学の学問的領域から分析し考察したもの、いわゆる量的調査として統計的に分析し考察が加えられた分析結果のこととしたい。

また伝道活動は様々な展開を見せ、経緯や状況に応じ独特な工夫が凝らされている。その実態を把握するには、単に統計調査による分析結果だけではなく、事例の1つひとつを研究していく実地調査による分析結果とともに検討することが重要であると考える。

ここでいう実地調査とは、面接法を用い、聞き取り調査を中心として事例を研究し、その実態や背景、更にそこに存在する意図や意識を深く明らかにしようという、いわゆる質的調査として実施され、社会学の学問的知見やその領域などを用いて分析した調査結果のこととしたい。

広範囲において、様々に展開されている伝道活動の実態を把握するために、統計学や社会学など、様々な学問分野による知見やその専門的領域から導き出された統計調査や実地調査の分析結果から窺ってみる。

3・1　統計調査：宗勢基本調査について

伝道活動についてその実態を把握するために有効と思われる統計調査には、浄土真宗本願寺派において実施された「第9回　宗制基本調査」を上げることができる。

「宗勢基本調査」とは、

国における「国勢調査」と同様、宗門にとって最も基本的な統計調査であり、宗務全般において確実な調査統計資料を収集し、もって宗門の発展に寄与するために行われるもの。(2)

とあり、「第9回　宗勢基本調査」はその趣旨が「第9回宗勢基本調査実施条例」第一条に

宗門に包括される一般寺院及び教会（以下「寺院」という。）の現況と社会の世相を統計的に調査・分析し、もって宗門の抱える諸課題への適切な対応解決を図るための基礎資料とすることを目的とする。(3)

と示されているように、本願寺派の現況を統計的に調査し分析した基礎資料である。

この「宗勢基本調査」は一九五九(昭和三四)年から、五年に一度を基本として実施されている統計調査である。

調査回	実施年	調査対象	（回収率）	調査報告
第1回	一九五九(昭和三四)年	全寺院	(91.5%)	『末寺実態報告』
第2回	一九六四(昭和三九)年	全寺院	(95.0%)	『宗報』32、35号
第3回	一九七〇(昭和四五)年	全寺院	(97.0%)	『宗報』88号
第4回	一九七六(昭和五一)年	全寺院	(96.3%)	『宗報』152号
第5回	一九八三(昭和五八)年	寺院：二〇一二		

	門徒：二〇一二	（72.6％）	『宗報』253号
第6回　一九八九（平成 元）年	寺院：二〇七二		
	門徒：一〇三六〇	（64.3％）	『宗報』306号
第7回　一九九六（平成 八）年	全寺院		
	門徒：各寺男女各一名	（50.6％）	『宗報』380号
第8回　二〇〇三（平成一五）年	寺院：二九六五		
	門徒：各寺男女各二名	（49.6％）	『宗報』460号
第9回　二〇〇九（平成二一）年	全寺院：一〇二八〇		
	門徒：各寺代表一名	（59.6％）	『宗報』521、533号[4]

上記のように長期にわたり繰り返し調査を行っている。第9回宗勢基本調査における調査研究員は社会学等の専門的研究者が登用されている[5]。しかし、過去の調査担当者は必ずしも同一ではなく、また各回にはその時代や本願寺派の置かれている状況などから、質問内容や調査内容が異なることもある。いまその質問内容を記述することはしないが、上記の図表に示された「調査対象」がまちまちであることからも、その調査の方法さへも異なっていることが見て取れる。

しかし、長期にわたり、繰り返し調査している「宗勢基本調査」は定点的に継続して質問している項目もあり、過去の調査結果との比較などを通して、より深い分析ができ、その統計調査の結果は信頼度が高いと言えよう。

第9回宗勢基本調査では、調査内容の柱立てとして目標を

①寺院周辺の社会環境、②寺院活動、③寺院運営、④寺院から地域社会・全体社会への働きかけ、⑤寺院の将

来展望[6]

の5つを掲げ、その調査内容の項目を

(1)属性、(2)施設、(3)経済状況、(4)寺院基盤、(5)役割分担、(6)寺院活動、(7)社会活動、(8)将来像、(9)後継者、(10)宗教心、(11)宗門[7]

の調査項目をもって、調査が実施された。

質問については「寺院」「住職」「坊守」「門徒」を対象として個別に作成され、それぞれの質問数が、寺院用には57問、住職用には52問、坊守用には56問、門徒用には68問となっている。[8]質問合計数が183問に及ぶ調査票を、本願寺派の全寺院一〇二八〇ヶ寺に対して行った。

またその分析結果は、

各設問の単純集計をもとに、過去の宗制基本調査との比較分析、教区別等のクロス集計を用いたグラフ化作業など、各調査研究員の問題意識に基づく、詳細かつ多角的な統計分析結果[9]

とあるように、第9回宗勢基本調査は膨大なデータを回収し、過去のデータとも比較しつつ分析されたものであり、社会学などの専門的な学問領域からの検討も加えられ詳細かつ多角的に分析されたものである。

このような分析結果は、伝道活動の実態把握には非常に有効的と考えることができる。

この宗勢基本調査の分析結果を元にして、伝道活動の実態を把握することが伝道活動の研究の必要不可欠な1つということができるであろう。

3・2・1　統計調査から窺う伝道活動の実態

統計調査は、調査票を単純集計した『中間報告書』と、そのデータを元に専門性をもった各調査研究員によって、分析と考察がなされた『報告書』によって公開されている。

『報告書』には「寺院周辺の社会的環境」「寺院の施設とひとびと」「寺院の人的基盤」「寺院の経済的基盤」「寺院活動の現況」「寺院に関わる人々の役割」「門徒の宗教行動の特色と住職の社会的活動の課題」「宗門の活動」「寺院の護持継承とその展望」[10]をテーマに各調査研究員が調査で回収した膨大なデータを統計的に分析し考察を行っている。

この中、伝道活動の研究に直接的に関わるのは、「寺院活動の現況」をテーマとした分析結果と考察を中心に窺わなければならない。しかし他のテーマにも大いに参考にするべき考察がある。

伝道活動とは寺院活動の1つであるので、まず伝道活動の検討に入る前に、住職の仕事の重要さと、寺院に対する門徒のニーズとは何かについての認識を確認しておきたい。

調査票を単純集計した『中間報告』から窺ってみると、

住職用調査票に

問24「あなたは、《住職の仕事》として次の中のどれが重要だと思いますか。特に重要だと考えているものを3つ選んでください。[11]」

と設問されている。同様の問いは、坊守用調査票・門徒用調査票にも同様の設問があり、比較して結果が提示されている。

その結果を窺うと、住職・坊守・門徒のそれぞれにおける割合の数値は異なるが、上位3位をみると、

1位「寺院の法要・儀式の執行」

2位「教えを伝えること」

3位「在家での法要・儀式」

となっており、「住職」「坊守」「門徒」ともに同じ順位となっている。

これは、住職・坊守・門徒ともに住職の仕事の重要な項目が何であるのかを、同様に考えているということと言えよう。また住職は寺院活動の中心的存在であるので、その仕事の重要さということは、概ね寺院活動の重要さに対する意識を把握する一助となるとも考えられる。

『報告書』においては、寺院が門徒にとってどのような意味を持つのかが分析されている。門徒用調査票に設問された

問47「お寺は、あなたにとって、どのような意味がありますか。次の中から、あなたの考えにもっとも近いものから順に2つ選んで、その番号を記入ください」[12]

の回収データの中、第1選択、第2選択を合わせた統合選択率としては、「教えを授かるところ」（30.4％）、「自分の人格の向上、心の修養に努めるところ」（22.7％）、「お互いに信仰を語り合い、深め合うところ」（20.1％）という教えを聞き、精神的・情操的向上を内容とするものが上位を占め、次いで「葬儀や先祖の供養をするところ」（18.3％）となっている。

このデータを分析して

「教えを授かるところ」は第1選択・第2選択の全体を通じてもっともたくさんの回答を得ています（30.4％）。

これは第8回調査（二〇〇三年）結果と同じ傾向です。[13]

と示し、従来の寺院の存在意義は「教えを授かるところ」と意識されていることを指摘している。

統合選択率では4位に位置する「葬儀や先祖の供養をするところ」（18.3％）は、第2選択としては「教えを授かるところ」（30.2％）に次いで2番目の（20.8％）となっており、法要・儀式などの儀礼に対する意識が高いと示されている。

この、調査内容を分析し考察して、

第1選択として個人の精神性や情操性の向上の項目が選ばれがちであり、次に儀礼・儀式の場としての寺院という見方が選択に反映されたと考えられます。[14]

とまとめている。この「個人の精神性や情操性の向上の項目」の中には、第1選択、第2選択で最も上位を占めている「教えを授かるところ」という内容が含まれており、『中間報告』に明らかにされた住職の仕事の重要さの上位である、1位「寺院の法要・儀式の執行」、2位「教えを伝えること」、3位「在家での法要・儀式」とある「教え」と「儀礼」の項目が一致しており、住職・坊守・門徒の寺院活動に対する意識は項目的には相応していると言える。

ただし注意しなければならないことは、住職用・坊守用・門徒用とそれぞれ質問票を作成しているが、門徒については各寺院において代表1名を選び回答を依頼しているのであり、その1回答データで、門徒全体の意識と短絡的に考えることはできない。

しかもアンケート調査を依頼した門徒の寺院における役職は、『中間報告』によると、複数回答なので重複があるとしても「総代代表」（35.8％）、「総代」（32.7％）、「責任役員」（31.0％）、（『中間報告』p・64）となっており、寺院

活動に近しい関係にある人に依頼している。このような門徒代表の1回答によって、門徒全体の意識と決定づけるのには注意が必要である。

3・2・2　『報告書』「寺院活動の現況」から窺う伝道活動

伝道活動についての実態を把握するため、直接関わる『報告書』の「寺院活動の現況」を窺ってみよう。分析結果には、様々なデータを駆使して多角的な視点で分析されている。その傾向をみてみると、調査票が「寺院」「住職」「坊守」「門徒」と分類されていたことを利用して、それぞれの調査データを比較しながら分析されていること。また教区・地域別のデータとの関係性をもって分析されていること。

この『報告書』における報告内容を窺うと、

1．法要儀式と年中行事
2．日々のお参り
3．伝道教化活動
4．寺院活動についての認識

にまとめられている。

「1．法要儀式と年中行事」においては、報恩講法要が重視され、97.7％の寺院で実施されており、次いで永代経法要が83.0％となっていて、第1回の宗勢基本調査から連続してこの順位は変動がないことが示されている。

このことは浄土真宗本願寺派の寺院においてやはり報恩講が重要視されていることの証しと言えるであろう。報恩講は宗祖親鸞聖人の祥月命日を縁として、勤修されてきた法要である。永代経法要は「故人の命日ごとに永代に

読経する法要」[15]であって、各個人の縁のある物故者の命日を縁としている法要である。この永代経法要よりも報恩講の実施率が高いということは、各個人の縁ある物故者よりも、浄土真宗という教法を開顕した親鸞聖人を重要視しているとも考えられる。真に浄土真宗に相応しい結果とみることができる。

また、実施率が低い法要として、仏前結婚式、初参式が上げられている。

「3・伝道教化活動」においては様々に分析されているが、その中から「組織教化団体」「諸活動」「都市開教の意欲」「寺報発行」「インターネットの活用」についての分析に着目したい。

・「組織教化団体」

団体を組織して伝道教化する活動について、次の7項目の選択肢を上げて組織率と活動の活発さについて分析されている。

「土・日曜学校、子ども会」「スカウト」「仏教青年会」「若婦人会」「仏教婦人会」「仏教壮年会」「講社」の7項目の選択肢の中において、「仏教婦人会」の組織率75%以上であり、その活動も66%がが活発であることが示されている。その他の教化団体は50%以下の組織率であり活動の活発さも50%以下と分析されている。

また、第1回宗勢基本調査からの調査結果と比較しても、仏教婦人会の組織率は他の教化団体とは比較にならないほど格段に高い数値を示してる。これらのことから教化団体は「仏教婦人会」がその中心的な位置を占めていることが明白となった。

・「諸活動」

諸活動として次の15項目の選択肢が上げられ調査されている。

「掲示伝道」「文書伝道」「訪問伝道」「真宗・仏教講座」「常例法座」「聖典などの学習会」「ビハーラ活動」「念

仏講・尼講などのお講」「人生相談」「盆踊り」「旅行会」「お茶・お華・習字などの教室」「季節の集まり（新年会、花見の会など）」「その他」「いずれも行っていない」の選択肢の中で「掲示伝道」（69.2％）、「文書伝道」（47.5％）、「常例法座」（36.6％）の順で実施率が高いこと、また過去の調査と比較して「掲示伝道」「文書伝道」が定着していると分析している。

次いで実施率が高いのが「聖典などの学習会」（13.6％）、「真宗・仏教講座」（10.4％）と続き、実施率が低いものは、「訪問伝道」（5.8％）、「人生相談」（5.6％）となっている。

・「都市開教の意欲」

住職・坊守ともに、都市開教の意欲は「ない」が住職（58.9％）、坊守（56.6％）と最も多く、わからないを加えると住職（84.1％）、坊守（92.6％）となる。都市開教への意欲は非常に低調であることを示している。

・「寺報発行」

寺報を発行していない寺院（59.7％）、定期発行（26.2％）、不定期発行（14.1％）となっていることを示し、寺報発行の全体は（40.3％）であることを示し、過半数が発行できていないことには大きな労力がかかるからではないかと分析している。

・「インターネットの活用」

寺院におけるホームページやブログの開設について、開設（7.7％）、開設する予定（11.2％）、開設する予定なし（81.1％）と示して、この情報化が進む時代に、低調であると分析している。

まとめにおいて、

仏前結婚式、初参式、都市開教、インターネットの活用がいずれも低調であり、各寺院、宗門としての今後の

課題と言えます。[16]

と示されている。

3・2・3　『報告書』「宗門の活動」から窺う伝道活動

本願寺派の寺院は、地域ごとに組として区分けされ、様々な組活動が実践されている。その組の活動に対する意識を窺っておきたい。

住職の仕事の重要さが1位「寺院の法要・儀式の執行」、2位「教えを伝えること」であったことに対して、組の活動では、1位「教化の充実」で、「寺院の法要・儀式の執行」は下位に位置することを示している。これを考察して、

> 法要・儀式の執行は、各寺院で執り行い、教化・伝道活動は、組として各寺院が連携しながら進めていく必要があると認識されているのではないでしょうか。[17]

とまとめている。このことは伝道活動の主催者を1人ひとりの住職が担うことに、困難を感じ、共同して伝道活動をするなど、主催者の拡充が求められているものと考えられる。

4・1　実地調査：「お寺はかわる」について

伝道活動について、その実態を把握するために有効と思われる実地調査には、「お寺はかわる」として公開された左記の情報が有効と考えられる。

浄土真宗本願寺派において、現代における寺院活動の活性化に活用されることを期して、寺院活動の実地調査が

行われた。その事例は、『院活動事例集　お寺はかわる　―新たな始まり―』[18]が発刊され、次いで『宗報』に「シリーズ　お寺はかわる」[19]として連載されて、全26事例が紹介されている。

これらの実地調査は、

現代における寺院の活動を支援するために企画されたもので、宗門寺院の活動を紹介し、各寺院においてはこれを参考としていただくことを目的とする[20]

とあるように、本願寺派寺院の特徴ある活動を抽出し、その活動を聞き取りすることはもちろん、具体的な工夫、その背景、思いなどを調査しようとしたものである。

調査方法としては、特徴ある事例を実地に調査し、その内容や背景、思いを調査するために、あらかじめ質問内容や項目を検討し、更に対象者や事例に応じて、質問の追加などを行い、自由度をもって調査する半構造化面接法を用いている。

また、寺院活動の事例を広く調査して本願寺派の全寺院に参考となるよう、特定の地域や事例の傾向が偏らないように配慮され、全国的な視野で調査されている。

調査対象の抽出に関しては全国の本願寺派寺院の活動を行政的に区分している31教区・533組の全てを対象にしたアンケート調査を行い、特徴のある寺院活動を行っている事例として570ヶ寺の紹介を得た。そのアンケート調査を元に、寺院活動の実態を網羅できるように、様々な視点から調査対象を抽出した。

更にそれぞれの調査対象に関して、聞き取るべき内容を検討して、質問項目の精査などを行い、研究員が実際に現地に赴き、聞き取り調査が行われた。

その調査結果が『お寺はかわる（事例集）』と『お寺はかわる（宗報）』にて公開されている。実地調査を行わな

かったが、特徴ある寺院活動として収集された情報も『お寺はかわる（事例集）』に53例が情報提供されている。実際に調査をした研究員の所感などを交えての報告は、多種多様な切り口を見せているが、調査対象の事例の内容や工夫、またその背景や思いを聞き取っている。

多様な寺院活動の事例の中に、当然その中心的な実践である伝道活動も多数調査されており、伝道活動の実態を把握するための質的調査としては有効な資料と言える。

4・2　実地調査から窺う伝道活動の実態

『お寺はかわる（事例集）』と『お寺はかわる（宗報）』に報告された26の事例から、伝道に関する調査結果を通して、伝道活動の実態、特にどのような工夫がなされているのかを窺ってみる。

伝道活動の特徴や工夫を大別すると、「主催者の拡充」と「法座の工夫」とすることができる。

4・2・1　「主催者の拡充」

伝道活動というと、住職が中心となって実施されるものと考えられがちである。しかし、1人の住職が継続的に伝道活動を継続していく中には、

・伝道活動のマンネリ化
・伝道活動へのモチベーションの低下

という課題が常時つきまとう。

実地調査の事例の中には、志を同じくする仲間、地域的なつながりの仲間、数ヶ寺合同、さらに組・教区という

ように、伝道活動の主催者が拡充されて、継続するだけでなく発展し活性化している事例が見受けられた。また、僧侶に限らず、門徒が伝道活動に積極的に参画することにより、様々な好結果を生んでいる。

ともに伝道教化活動をしていこうとする人と協力して実施するところに、規模の拡大化や活動の継続性が生まれ、伝道のマンネリ化が打破され、モチベーションの向上がなされている。

活発な伝道活動の事例の中、次のような主催者の拡充による活性化が見受けられる。詳細な内容については、『お寺はかわる（事例集）』『お寺はかわる（宗報）』に譲り、ここではその概要だけを数例記しておく。

・2ヶ寺合同での日曜学校

一九七九(昭和五四)年から開設された日曜学校。臨寺と共同で開催しているから継続し楽しみも多い。日曜学校卒業生がスタッフとして参画できている。(『お寺はかわる（事例集）』p.24)

・組とは別に7ヶ寺が合同で開催する「法中大会」

戦前から続く法座が、現在では組内を4ブロックにわけたうちの1ブロック7ヶ寺が合同で法座を開設している。(『お寺はかわる（事例集）』pp.68-71)

・組内若手僧侶が中心となって、密接な関わりをもちつつ開催する組連研

組単位で行う「門徒推進員養成連続研修(連研)」を9期開催し、399名の修了者と224名の門徒推進員を育成した。その連研は組の若手法中が中心スタッフとなって継続してきた。(『お寺はかわる(事例集)』pp.73-74)

・青年僧侶協議会が主催して15組64ヶ寺からの参加がある温泉説法

一九八七(昭和六二)年に結成された青年僧侶協議会の主催で、各地の温泉を巡りながら聴聞する会が継続され、

15組、64ヶ寺が参加している。（『お寺はかわる（事例集）』pp.81-82）

・ご門徒さんで組織する教化推進委員会による伝道教化活動の開催

寺院の教化活動を考える場として住職・坊守・門徒総代・仏婦代表・仏壮代表・門徒推進員で教化推進委員会を発足させ、様々な課題に即応した活動を展開している。（『お寺はかわる（宗報）』503号　pp.26-27）

これらの事例では、伝道活動の主催者を住職1人とするのではなく、近隣の寺院との連携、同じ地域の寺院との連携、組単位での主催、本願寺派内の行政単位である組の枠だけに縛られず多数の寺院によって、また僧侶だけではなく、坊守や門徒が伝道活動の主催者になることで、伝道活動が実践されている。

1人の住職や1ヶ寺の寺院ではできない、伝道活動や法座を開設している事例が報告されていた。1人で主催し続けると、年中行事として決まりきったことをこなすだけという、マンネリ化に陥りやすいが、主催者の拡充を行うことによって、マンネリ化を防ぐことができていた。また伝道活動の主催者として互いに刺激を受け合うことは大きな意味がある。それは、多くの仲間とともに伝道活動を担うことで、自らの至らなかったことに気づかされ、次の伝道活動をより充実したものにすることができ、人材の育成にも大きな意味をもつ。

1人で伝道活動を継続していると、1つひとつの伝道に対するモチベーションが低下してしまうこともある。しかし、志を同じくする仲間と一緒に伝道活動を担うことで、モチベーションを高く維持することにもなることが、実地調査の分析結果によって明らかに示されている。

統計調査の「組に対する意識」において明らかに示されていたように、組に対して連携が求められていたことは、伝道活動の主催者が1人では厳しく、拡充させたという意図の表れとも考えられ、調査結果の両者は符合している

と言えよう。

4・2・2「法座の工夫」

多くの法座活動の事例の中には、よく考えられた工夫が多く見受けられた。伝道教化活動をより充実したものにしようと、生み出された工夫は、各寺院やその活動の背景によって様々であり、まさにバラエティに富んでいる。それらの工夫について内容を検討すると、

「新しいアイデア」
「法座に参りやすくする工夫」
「伝統への工夫」

と分類することができる。

4・2・2・1「新しいアイデア」

「新しいアイデア」としては、いままでの伝道教化活動では実施されていなかったことを、チャレンジ精神をもって実施されている事例である。概要だけであるが数例を上げておこう。

・チャレンジ精神で、様々な伝道方法に挑戦

寺院や組という枠組みを超え、多くの寺院が参画する法座で、若手僧侶がスタッフとなって準備や練習を惜しまず、朗読劇・演劇説法・カラオケ説法・ギター説法・寄席説法・絵解き説法・影絵説法、漫才説法に挑戦した。（『お寺はかわる（事例集）』pp.82-84）

・聴聞される方の気持ちを汲んだアコーディオン法話

日曜学校で音楽に親しみ、合唱経験などを活かし200曲の持ち歌を駆使した、アコーディオン法話。（『お寺はかわる（宗報）』515号　p・15）

・人生の節目を仏縁に

人生の節目の1つひとつを仏縁としようと、『法式規範』では制定されているが実施していることがほとんど見受けられない「入門式」を実施。初参式に参拝した子が小学校入学時に入門式を受けるシステムを構築。また米寿の集いで法座を開設。（『お寺はかわる（宗報）』517号　pp・13－18）

・本堂を使っての在宅療養の集い

行政と協力して、本堂を開放したデイサービス「ビハーラとも在宅療養者の集い」を開催し法話を行う。地元密着なのでスタッフと療養者に垣根のない老老介護の良さがある自然な介護。（『お寺はかわる（事例集）』pp・53－55）

・落語や漫才、1人語りの演芸を取り入れる。

本堂で様々な演芸会を企画。（『お寺はかわる（事例集）』p・22）。プロデュースの専門家の協力を得た演芸会の企画。すぐさま法要への参拝が増えることなどを期待せず、40年スパンで寺院と門徒との関係を築いていく超・長期的展望でのアイデア。（『お寺はかわる（宗報）』506号　pp・31－35）

このように、様々な新しいアイデアの工夫は、失敗をおそれずにチャレンジ精神で行われているが、短絡的な思いつきでなされていたわけではない。実地に調査を行うことで、情報を収集して、ニーズはどこにあるかを把握することから始まり、準備を整えてはじめて質的に高い伝道教化活動としていたことが明らかになっていた。

「一瞬人を集めるのは簡単なことです。法座などに結びつけていくことが難しいのです」[21]と述べた主催者の一言は、それだけご法座へとつながるご縁になることを意識していたから吐露されたと考えられる。新しいアイデアで工夫をすることによって、法座の参拝者数がすぐに増えることを期待するが、決して即効性を求めず、時間がかかろうとも、教えに遇うことにつながっていくようにという思いのもとに、実施されていたことは着目すべき点である。

4・2・2・2　「法座に参りやすくする工夫」

実地調査の事例には、各寺院の状況に応じながら、少しでも法座に参りやすくする工夫がなされていた。

・地域の状況に応じた工夫

交通の便が悪い地域ではマイクロバスを使っての送迎（『お寺はかわる（事例集）』pp.20-21）、近隣地域との協力で寺社とのスタンプラリーの実施（『お寺はかわる（宗報）』pp.25-26）、近郊都市における離郷門信徒の集い（『お寺はかわる（事例集）』p.75）などが紹介され、寺院の置かれている状況に応じながら、少しでも法座に参りやすいようにと工夫されていた。

・対象を絞った工夫

法座にお参りしてもらおうと呼びかける対象を絞った工夫として、子どもに対象を絞った事例としては、門徒によって子どもへの教化活動に特化した「ふれあい空間創造集団「サンガ」」（『お寺はかわる（宗報）』503号　pp.27-29）、小学校入学時にお寺で行う入門式（『お寺はかわる（宗報）』517号　pp.13-15）、子どもと一緒にお参りできるようにキッズルームの設置（『お寺はかわる（事例集）』p.42）などがあった。

・法縁の工夫

法座に参拝する門徒の多くは、近親者との死別がご縁となっていることが多い。お墓を合葬して法座での聴聞のご法縁としている「法縁廟のご縁」（『お寺はかわる（事例集）』pp.62-66）、勤行を身近に感じられるように「意訳聖典」を用いる（『お寺はかわる（事例集）』p.89）、音楽を取り入れる（『お寺はかわる（事例集）』p.89）、宗教的空間として伽藍の整備（『お寺はかわる（事例集）』p.39-40）などがあった。

このような事例を窺うと、様々に参りやすくする工夫が凝らされているが、そこには、特別な条件が整わなければ困難な工夫ばかりではなく、参りにくくしている要因を取り除き、少しの工夫で参りやすくなることが、多々示されていた。

4.2.2.3 「伝統への工夫」

実地調査の事例には、長い伝統の上に継続されてきた法座を、より充実した内容とする工夫が見受けられた。

・精進料理の会

寺院のお斎で用意した精進料理が人気を呼び、仏縁となった。（『お寺はかわる（事例集）』pp.11-12）

・芳名録への記帳

参詣者には芳名録に記帳してもらい、寺院活動の案内を送る。法座後にはみんなで記念撮影をする。（『お寺はかわる（事例集）』p.41）

・仏法聴聞を主としたスタンダードなスタイルを最重要視

いろいろな新しい取り組みもあるが、やはり仏法聴聞というスタンダードなスタイル重視しているからこそ継続していける。（『お寺はかわる（事例集）』p.77-80）

・蓮如上人以来の伝統をもつ講の活動を重要視

三業惑乱から講の必要性を痛感して講活動が盛んになり、36年に1度回ってくる講を大切にすることで仏法聴聞に励む。（『お寺はかわる（宗報）』515号　pp.13-15）

・組連研の充実によって、僧俗ともに交流が深まる

「連研」は新しい法座の形態とも言えるが、既に定型化した研修会ということでは新しい伝統とも言える。その連研の充実をはかる。（『お寺はかわる（事例集）』pp.73-74）

などがあった。既に長い伝統をもつ浄土真宗の活動であるが、この伝統を単なる年中行事や習慣というレベルにせずに、その意義を改めて確認し、大切な法縁として尊んでいく姿が窺い知れた。

以上のように、質的調査である実地調査から、特徴ある伝道活動を分析したところ、法座の事例には多くの工夫が見られた。その基礎には「教えを共に聞きよろこびたい」という思いがあり、そのために「新しいアイデア」「参りやすさの工夫」「伝統への工夫」などが実践されていたことが窺い知れた。

5．真宗学の学問領域からの検討

統計調査・実地調査を通して伝道活動について窺い、実態の把握に努めた。その全ての実態が把握できたとは言いえないが、特徴のある伝道活動について、調査結果を窺うことで、その一端を把握することができた。

広範囲にわたり、多種多様な実践が展開されている伝道活動なので、その実態を把握するために統計調査や実地

調査を通して窺うことは重要であるが、それだけに終始しては意味がない。

伝道活動が浄土真宗という教えを基にした実践である以上は、真宗学の学問領域から検討しなければならない。

5・1　統計調査「住職の仕事の重要さ」についての検討

住職の仕事の重要さに関して、住職・坊守・門徒の寺院活動に対する意識が、上位3位が、1位「寺院の法要・儀式の執行」、2位「教えを伝えること」、3位「在家での法要・儀式」と全く同じ順位となっていた。その内容は法要・儀式を執行する「儀礼」と「教えを伝える」ということに大別できる。

また、門徒用調査票において、寺院の存在意義を問い、その結果は「教えを授かるところ」と次に「儀礼・儀式の場としての寺院という見方」が選択されていたことを窺った。この内容は「教えを授かる」と「儀礼」であり、住職の仕事の重要さと同様の内容であり、一応は項目的に相応していると窺った。

しかし、詳細に考察してみると、住職の仕事の重要さと、門徒の寺院存在意義の調査結果の順位が逆転していることが明らかである。項目的には相応しているが、この順位の逆転をどのように考えるかが、大きな問題であろう。量的調査の分析結果から、短絡的に結論づけることは困難であるが、おおよそ次のようなことが言い得るのではなかろうか。

住職の仕事の重要さ、ひいては寺院活動としては「儀礼」が最上位となるが、門徒の寺院存在の意義としては「教えを授かるところ」が最上位であることから、「儀礼」を重要視することは、単に法要儀式の荘厳さや規模の拡大、伝統的法要の維持継承、また新しい法要儀式の模索などが主眼ではなく、その儀礼を通して、教えに遇うことが求められていると見ることができるのではないか。既に言及した通り、この統計調査における門徒とは、各寺

1名の代表で、しかも法人の役員であるような人なので、必ずしもこの意見が、門徒全体の意見であるということは短絡的に決めることはできないが、しかし、統計調査としてはやはり「教えを授かるところ」が最も上位に位置することに重きを置いて考えるべきであろう。

統計調査の分析結果からすると、微かな差異であるかも知れないが、浄土真宗という教法からの視座、真宗学の学問的領域から検討すると、まさにこの点を見逃すことはできない。

住職の仕事の重要さが「儀礼の執行」という認識で共通しており、儀礼の執行に重点を置いたとしても、教えに遇うことが求められていることに注目すれば、そこには教えをともに聞信し仏徳讃嘆しようという意がなければ意味なきものとなる。

浄土真宗という教法における、信心の念仏者の実践は、阿弥陀如来の本願に「乃至十念」[22]とあり、「信文類」には、「真実信心必具名号（真実の信心には必ず名号を具す）」[23]と示されているように、信相続の易行であり、それは如実に仏徳を讃嘆することなのであるから、儀礼の執行も仏徳讃嘆に意義を見なければならない。

5・2　統計調査結果「報恩講の重視」についての検討

統計調査の分析結果から、本願寺派の寺院における法要は、報恩講の実施率が97.7％という高い数値を示している。しかしこれは100％でないということであり、本願寺派寺院で報恩講が勤修されない寺院があることが判明した。

人員的な問題や経済的な問題など様々な要因があるであろうから、一概に未実施寺院だけの問題と責めることはできない。しかし浄土真宗の寺院であるなら報恩講を厳修することは年中行事でも欠かすことのできない法縁であると考えるべきで、勤修できなかった寺院の要因を検討し、克服する方途を研究するべきであろう。

従来、門徒の儀礼に対する思いは葬儀や法事などを中心とし、その根底には先祖供養などの意識が高いと考えられていたと言えよう。このことは門徒用調査票の寺院の存在意義を問う選択肢に「葬儀や先祖の供養をするところ」とあったことからも窺える。この「葬儀や先祖の供養をするところ」の選択率が高いことも指摘されているから、先祖供養などの意識が高いことは明白である。しかし、それよりも「教えを授かるところ」を寺院の存在意義として選択している結果を考えると、一概に先祖供養などの意識だけで「儀礼」を求めているわけではないと考えることも可能である。追善供養などは不必要であり、不可能であるという浄土真宗の儀礼に関する姿勢と、仏徳讃嘆が主であるとする浄土真宗における儀礼の意義を、日頃から耳にして、統計調査においては「教えを授かるところ」が上位となったのかもしれない。統計調査からだけでは明確に分析結果が見えてこないので、更に実地調査などで実態を調査する必要があるだろう。いずれにしても浄土真宗における儀礼の意義付けを明確に示し続けることが重要であると考えられる。

いまは、統計調査の分析結果から、先祖供養などに関わる儀礼が重視されているが、それにもまして、寺院の存在意義を教えに遇うということにあったことを重く受け止め、儀礼を伝道の場となる方途を研究するべきと考える。また数値的データは実施率の問題であり、それは97.7％という高い数値を示しているが、その内容に着目してみなければならない。

たとえば、法要日数の削減、法座数の減少、参拝者の減少、などはどうなのか。いやそのような現象的な推移ではなく、本当の意味において「宗祖である親鸞聖人」つまり、この私を平生聞信の一念に正定聚に入らしめ、命終に往生即成仏させ、還相摂化せしめるという、阿弥陀如来の往還二回向の本願の救いを開顕した親鸞聖人を仰ぎ、その恩に報いるという思いで勤修されているのか否かを問わねばならない。

もし、年中の行事で最も大切にしなければならない法縁と言われているから、古くからの伝統で毎年勤めているから、というマンネリ化に陥って勤修されているならば、たとえ実施率が100％となっても意味はない。

蓮如上人が『御文章』3帖目9通に

今日は鸞聖人(親鸞)の御命日として、かならず報恩謝徳のこころざしをはこばざる人、これすくなし。

…中略…

あひかまへて、日ごろの信心のとほり決定せざらん未安心のひとも、すみやかに本願真実の他力信心をとりて、わが身の今度の報土往生を決定せしめんこそ、まことに聖人報恩謝徳の懇志にあひかなふべけれ。(24)

と述べて、1人ひとりが信心獲得することこそ、報恩講の意義にかなうことであり、最も重要なことと示されている。

このことから窺うと、実施率の高さの問題だけではなく、報恩講に参拝する1人ひとりの信心獲得について、深く配慮されなければ意味がない。

5・3　統計調査結果「組織教化団体」についての検討

統計調査の分析結果から、「組織教化団体」の中、群を抜いて組織率や活動の活発性が高かったのが、仏教婦人会であった。過去の調査結果からも他の組織教化団体と比較して格段の活動を展開していることが窺い知れた。

仏教婦人会以外の組織教化団体の低迷を歎き、数値的に組織率を上げ、活性化させようとすることが重要という考察は、統計調査の結果からも導き出される。

しかし、数値的な問題だけではなく、浄土真宗という教法の視座から検討しておかなければならない。

阿弥陀如来の救いの対象は、「其機者一切善悪大小凡愚也（その機はすなはち一切善悪大小凡愚なり）[25]」と示されている通り、あらゆる一切のいのちある者であるから、仏教婦人会だけでなく、様々な世代やグループも組織教化団体を組織して活性化をはかるべきと言うべきである。

その組織教化団体は同信一味の御同朋だけを対象とするのではなく、未だ信心を獲得していない人が、阿弥陀如来の仏徳を讃嘆できるように工夫する必要がある。なぜなら、阿弥陀如来の本願には「唯除五逆誹謗正法[26]」とあるからである。親鸞聖人はこの一文を『尊号真像銘文』に

「唯除」といふはただ除くといふことばなり。五逆のつみびとをきらひ誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり。[27]

と解釈して、逆謗の者こそ救いの正しき目当てであることを示している。

また、「信文類」には「謗法・闡提・回心皆往[28]」と示して、未だ信心獲得してない者に回心せしめて救おうというのが本願の意であったことを開顕している。いわゆる悪人正機であり、浄土真宗は万機普益の教法であるから、この本願の意を承けた上における組織教化団体も、あらゆる人が阿弥陀如来の仏徳を讃嘆できるように活動していくことが重要である。

5・4　統計調査結果「諸活動・都市開教の意欲・寺報発行・インターネット活用」についての検討

統計調査の分析結果によると、伝道活動には多種多様な方法があり、その実施率も様々であったことが窺い知れた。上位に「掲示伝道」「文書伝道」「常例法座」が位置していることは、寺院の存在意義を「教えを授かるとこ

ろ」していたことと相応し、寺院活動の主たる活動が伝道活動にあると認識されていることと理解できる。

このような統計調査の分析結果を確認することで、伝道活動に邁進するモチベーションを向上させるべきであろう。

統計調査の分析結果からすると実施率の低い伝道活動に重点を置いて活性化させるべきという方途が導き出されることが推測される。

しかし、浄土真宗という教法の視座から窺うと、実施率の低い伝道活動の方法を向上させることだけではなく、その実施されている伝道活動の内容について、深く検討しなければならない。

実施率が高い掲示伝道や、文書伝道、常例法座であっても、その内容が浄土真宗という教法に相応しいか否か、誤解を与えないか否かなどを厳しく検討することが重要である。実施率が高くとも、内容が浄土真宗に不相応であったり、誤解を招くような内容であったりするならば、伝道活動のつもりで実施しているが、反対にマイナスの効果しか生み出さないことになる。実施率が高いほど問題となる。

実施率が低い伝道活動であっても、その内容が浄土真宗に相応しいものであるならば、意味を見いだすことはできる。

寺報の発行やインターネットの活用の実施率があまり高くないが、実施を困難にしている要因さえ克服できれば、一気に実施率が向上する可能性を秘めている。その時も実施率の向上だけに目を向けるのではなく、その内容を厳しく検討しなければならない。

まとめにかえて

小論においては、浄土真宗における実践の伝道活動に絞り、その実態を把握するため、統計調査と実地調査を通して検討し、伝道活動の実態の一端を明らかにした。広範囲に展開され、多種多様な実態をもつ伝道活動を研究するには、このような様々な学問的知見や領域との相互的な検討を踏まえて研究するべきであるからである。

それ故に、統計調査や実地調査の分析結果からだけの検討ではなく、真宗学の学問的領域や視座から改めて検討を加えた。

いまその検討の結果、浄土真宗における伝道活動の最も重要とすることは、自らが浄土真宗という教法を聞信し、人々に伝えるという「自信教人信」「仏徳讃嘆」に本義があり、そのためには「法座の主催者の拡充」や「法座の工夫」など、様々な工夫を凝らしていくべきことにあったことが明らかになった。しかもここに公開された事例は、本願寺派寺院全体の中で、ごく一部であって、法座活動を初めとする伝道活動にはこれで完成という完全なる方法があるわけではなく、どこまでも工夫を重ねていくべきであることも明らかになった。今後は、更に実態を把握するために多くの実地調査を重ねなければならないであろう。そして、様々に深き工夫がなされていることを調査し、伝道活動の実践的研究を進めなければならない。統計調査や実地調査の分析結果と真宗学の学問領域の視座から、相互に検討していくところに、浄土真宗における伝道活動の実践的研究があると考える。

今回の研究においては、伝道活動の概略的な検討になっていることは否めない。今後は伝道活動の実践的研究について様々な要因を具体的に検討し、更に深く研究しなければならない。

註

（1）『宗報』496号、別冊『「宗制」の概要―変更の意図を中心に―』p.30

（2）「第9回　宗勢基本調査報告書」（以下『報告書』とする）、『宗報』533号（二〇一一（平成二三）年八月一六日発行）p.251

（3）「第9回　宗勢基本調査　中間報告書（単純集計）」（以下『中間報告書』とする）、『宗報』521号（二〇一〇（平成二二）年七月一六日発行、七月号付録）p.80

（4）『報告書』p.5

（5）『報告書』p.6

（6）『報告書』p.6

（7）『報告書』pp.7-8

（8）『中間報告書』p.32、p.53、p.62、p.79

（9）『報告書』p.251

（10）『報告書』pp.2-3

（11）『中間報告書』p.43

（12）『中間報告書』p.75

（13）『報告書』p.162

（14）『報告書』p.163

（15）『浄土真宗本願寺派　法式規範（増補版）』p.290

（16）『報告書』p.133

（17）『報告書』p.194

（18）教学伝道研究センター　本願寺教学伝道研究所　編集、二〇〇七（平成一九）年一二月一日　発行、（以下『お寺はかわる（事例集）』とする）

（19）『宗報』499号（二〇〇八（平成二〇）年七月号）から、『宗報』517号（二〇一〇（平成二二）年三月号）にかけて連載。（以下『お寺はかわる（宗報）』とする）

(20)『お寺はかわる(事例集)』p.6
(21)『お寺はかわる(事例集)』p.22
(22)『浄土真宗聖典(原典版)』(以下『原典版』とする)p.22、『浄土真宗聖典(註釈版)』(以下『註釈版』とする)p.18
(23)『浄土真宗聖典全書』2(以下『聖典全書』とする)p.90、『註釈版』p.24
(24)『原典版』pp.1157-1158、『註釈版』p.1150
(25)『聖典全書』p.59、『註釈版』p.202
(26)『原典版』p.22、『註釈版』p.18
(27)『聖典全書』p.606、『註釈版』p.644
(28)『聖典全書』p.129